OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フィラデルフィア美術館所蔵「花鳥人物図杉戸」と城郭御殿杉戸絵の画題についての一考察
Author(s)	木下, 京子
Citation	待兼山論叢. 芸術篇. 2016, 50, p. 27-64
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70043
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フィラデルフィア美術館所蔵「花鳥人物図杉戸」と城郭御殿杉戸絵の画題についての一考察

木下 京子

キーワード：狩野派／城郭御殿／「御本丸表向御座敷絵様」／「江戸城本丸等障壁画絵様」／廃城令

一 はじめに

米国・フィラデルフィア美術館に杉戸二十枚（三十四面・襖二面）が収蔵されている。杉戸は近世城郭御殿や寺院建築において不可欠な建具である。主に玄関から御殿への出入口や建造物内各室の廊下周りに設置され、通風・採光・遮音・防寒・防犯の用を果たしていた。と同時に、杉戸に描かれた絵は玄関や廊下など屋内を彩る装飾的役割を大いに果たした。フィラデルフィア本杉戸のうち、「立葵図杉戸」の寸法は各一九六×一九〇センチメートルで、縦横ともに一間を超える巨大な大きさである。また、「紅葉に鹿図」と「白鵬図」が表裏になっている二枚の杉戸の各寸法は、一七六・五×一九八・五センチメートルである。日本建築における襖や杉戸一枚の大きさの目安を「縦一

問、横半間」と考えるならば、両者ともにその倍もある法量であり、これらは名古屋城の本丸御殿や二条城の二之丸御殿といった城郭御殿の杉戸に匹敵する大きさである。さらに杉戸三十四面のうち、引手金具に「三ツ葉葵丸紋」があるものが二十一面、「裏葵六ツ葉紋」があるものが四面あることより、これら杉戸の一部は徳川家と所縁のある城郭御殿や寺院の建造物の一部であった可能性が考えられる。けれども、引手金具は杉戸本体から取り外すことができ、また引手を構成する金具「手掛り」・「縁座」・「小座」・「座金」[1]はそれぞれ分離できるので、売立時に引手金具そのものが意図的にすり替えられた可能性があることも視野に入れなければならない。本稿ではこれらの引手金具の意匠と杉戸絵を手がかりに、名古屋城と二条城に現存する杉戸、および「御本丸表向御座敷絵様　但　弘化度炎上以前筆者」と「江戸城本丸等障壁画絵様」の記録を参照しながら考察する。

二　全国城郭存廃ノ処分並兵営地等撰定方

欧米に杉戸が請来された経緯としてまず考えられるのが、明治六年（一八七三）に一月十四日に明治政府が公布した「全国城郭存廃ノ処分並兵営地等撰定方」[2]が及ぼした影響である。これは一般的に「廃城令」や「城郭取壊令」などと呼ばれている。本令が発せられた前年の明治五年（一八七二）に兵部省が廃止となり、陸軍・海軍両省が新たに設置され、城郭は陸軍省の管轄となった。陸軍省では武士に代わる徴兵による兵制の確立のために、その基地となるべき城郭の選定を行うこととなり、同年十一月に城郭の要・不要の区分を立て、大蔵省と条約書を取り交わし、正院（廃藩置県後に発布された太政官職制の最高機関）の採決を仰ぐこととなった。その結果、「全国城郭存廃ノ処分並兵営地等撰定方」が陸軍・大蔵両省に通達されたのである。このときに存城となったものが東京城など四十三城・一要

害であり、各地方の主要城郭は大部分が存城とされた。廃城となったものは、淀城など百四十四城・十九要害・百二十六陣屋で、これらの廃城は大蔵省に引き渡され、県庁などに使用されているものを除き、所在府県に命じて建物などを入札の上、払い下げ処分とされた。一例を挙げると、名古屋城は尾張徳川家から陸軍の管轄となったが、この際に二之丸御殿の取り壊しが決定し、茶室や材木、襖類は売却された。「花籠図・竹鶏図杉戸（背面）」は旧藩士により購入されたものと伝えられ[3]、現在は衝立装となり個人の所蔵となっている。（図版1）







（図版1）上・名古屋城二之丸御殿「花籠図杉戸」現在は衝立　江戸時代前期　一六一．六×一三四cm
（図版11）中・名古屋城本丸御殿上洛殿「花車図杉戸」（右面）寛永十三年（一六三四）重文　一九〇．三×一二七．五cm
（図版12）下・二条城二之丸御殿黒書院廊下「花籠図杉戸」寛永三年（一六二六）重文　各一九九．五×一七三cm

おそらく欧米の美術館が所蔵する襖や杉戸、欄間彫物など各種建築部材や装飾金具類は、城郭建築の取り壊しの際に売立てられ、古美術商を経て海外にも流出したのであろう。後述するボストン美術館所蔵の杉戸は明治三十四年（一九〇四）に山中商会により寄贈されたものである。

三　フィラデルフィア美術館所蔵「花鳥人物図杉戸」の基本情報

二で述べた通り、明治時代に解体された城郭建築の各種部材は売立てられ、その一部が海外に流出した。ヨーロッパでは、例えば大英博物館が多数の杉戸を所蔵しており、米国においては、フィラデルフィア美術館やボストン美術館、フリア美術館、クリーブランド美術館など日本美術部門を有する美術館の多くに杉戸が所蔵されている。しかしながら、アメリカにおいては杉戸は絵画ではなく建築部材と見なされ、「日本美術部門」ではなく「建築部門」もしくは「家具部門」に収蔵されていることも多い。またその重量ゆえに、一旦収蔵庫にしまわれるとそのまま放置されていることが多く、在米美術館において杉戸研究は進められていない。一方、日本国内においても杉戸（絵）研究は皆無に近いのが実情である。(4)

フィラデルフィア美術館本杉戸については、一九九三年に東京文化財研究所の在外日本美術品調査で初めて日本の研究者による調査が行われたが、その後調査が継続されることはなかった。比較的保存状態の良い「佐野の渡図杉戸」と「牡丹に唐獅子図杉戸」が常設展で展示されたことはあったが、二〇一五年に開催された「狩野派特別展」（Ink and Gold: Art of the Kano）に「白鵬図杉戸」と「西王母図杉戸」が初めて公開されるまで、これら杉戸の存在が広く知られることはなかった。

当該杉戸の基本情報は次の通りである。なお、引手金具の種類により、A、B、C、D、Eの五つのグループに分けた。

杉戸Aグループ（引手金具＝裏葵六ツ葉紋に立葵文）（図版2）

・表　牡丹に金鶏図　二面　・裏　関羽図　二面　各一七五×一四五cm

杉戸Bグループ（引手金具＝三ツ葉葵丸紋に菊花文）（図版3）

・表　寿老図（図版12）　二面　・裏　亀図　二面　各一七七×九二cm

・表　佐野の渡図（図版23）　二面　・裏　芦に鴨図　二面　各一七七×九二cm

・表　唐子遊図　二面　・裏　瀬田橋図襖（紙本著色）　二面　各一七七×九二cm

・表　西王母図（図版16）　二面　・裏　松に蔓図　二面　各一七七×一二三cm

・表　牡丹に孔雀図　二面　・裏　竹に高麗鶯図　二面　各一七七×一二三cm

杉戸Cグループ（引手金具＝三ツ葉葵丸紋に唐草文）（図版4）

・表　牡丹に唐獅子図　二面　・裏　柳に雁図　二面　各一七七×九二cm

杉戸Dグループ（引手金具＝丸に蔦紋に割り蔦文）（図版5）

・表　紅葉に鹿図（図版18）二面　・裏　白鸚図（図版19）　二面　各一七六・五×一九八・五cm

杉戸Eグループ（引手金具＝三ツ葉に蔓文）（図版6）

・表　立葵図　四面　・裏　左面に描印　四面　各一七六・五×一九八・五cm

これらの杉戸は一九六六年八月にフィラデルフィア美術館が山中商会より一括購入したものである。請求書以外の記録は何も残っていないが、大阪府下の某家が高野山にある寺院から入手したとのメモ書きがある。しかし、それがどの杉戸を指すのか分からず、このメモ書きそのものも信憑性が高いものか否か不明である。

四　引手金具について

名古屋城の引手金具については久保智康氏が平成七年（一九九五）に綿密な調査をされ、報告書を残されている。慶長期から寛永期にかけて制作された引手金具をA群からE群の六種類に分け、さらに細かく分類されている。引手意匠は絵画内容との関わり合いで決定されたようで、とくに色調は水墨・淡彩・金地著色といった描画方法に合わせるという明確な方針が存在したことを結語として述べられている。[5] 名古屋城事務所には本丸御殿は、慶長期と寛永期造営時の各図面と「上段之間」・「一之間」・「二之間」の部屋ごとの襖、および廊下周りの杉戸の引手金具が明確に分類されているため、襖と杉戸は同一の引手金具が使用されていたことが判明している。一方、二条城の引手金具の意匠はすべて同じである。（図版8）しかし、各引手金具の精度にはばらつきがあるようで、これは工人によるものか、制昨年によるものか不明である。名古屋城の六種類の引手のうち、フィラデルフィア本杉戸との間に共通点が見られるものは、久保氏が分類されたB群の引手金具（図版7）と杉戸Aグループの「牡丹に金鶏図」と「関羽図」

の引手金具（図版2）である。両者ともに楕円形の手掛りの中央に「裏葵六ツ葉紋」が施されているが、「裏葵六ツ葉紋」を取り囲む「七宝繋文」の意匠や縁座の装飾文様、そして縁座そのものの形状が大きく異なる。魚々子地の精度は全体的にフィラデルフィア本の方が粗く、縁座の魚々子地には鍍金後に墨差しが施されている。また「牡丹に金鶏図杉戸」の引手の手掛りと縁座の間の小座は、花びらのような装飾の連続文様となっており、さらにその内側には細工の細かい座金がはめられており、豪奢な造りである。この引手金具の造作からも杉戸Aグループの出所は由緒のある城郭御殿であることが推察されるが、「牡丹に金鶏図」の左面の引手金具の手掛りは図9のように文様が潰されており、どの建造物から流出したものか特定できないようにされている。（図版9）







（図版7）上・久保氏論文「名古屋城B群」の引手金具十〇．一×九．二cm（図版9）下・「牡丹に金鶏図杉戸」左面の引手金具

（図版2）中・フィラデルフィア美術館本「牡丹に金鶏図杉戸」の右面の引手金具　十三．五×十一．四cm

杉戸Bグループの引手金具（図版3）は手掛りに「三ツ葉葵丸紋」、縁座は十二の区画があり、上下左右の主区には四つの菊花があしらわられている。点数としてはこの引手が一番多く、杉戸の寸法も同じであることより同じ建造物からまとまって流出したものと考えられる。フィラデルフィア美術館の作品記録には、米国で剥落止めの修理の際に引手金具に光沢をもたせるために磨かれたことが記されており[6]、金具の風合いが損なわれているものもある。杉戸Bグループのうち、「西王母図」裏の「松に蔓図杉戸」の右面のみに、「丸に十字」の轡紋のある引手金具が何らかの理由で嵌められている。（図版10）手掛り中央にある「三ツ葉葵丸紋」は「徳川葵」と呼ばれる紋である。葵の芯は十三本であるが、家康から家光までが使用した江戸時代初期の徳川葵には三十三本の芯があるとのことで、二条城の引手金具の徳川葵の芯は三十三本となっている。十三本芯の徳川葵は家重・家治の頃から一定したということである。[7]







（図版3）上・フィラデルフィア美術館本「寿老図杉戸」右面の引手金具　十二．三×十〇．九cm
（図版8）中・二条城の引手金具　十四．八×十三．三～十三．五cm　（図版10）下・「松に蔓図杉戸」右面にある異なる引手金具

杉戸Cグループの引手金具（図版4）の意匠は、手掛り部中央にBと同じ「三ツ葉葵丸紋」が配され、唐草文が縁座全面に広がっている。縁座は十二区画に割付され、輪郭の形状、魚々子地や毛彫りの精度など引手金具の造作に共通性が見受けられるため、杉戸グループBとCは同じ建造物に設置されていたと推察できる。けれども、縁座そのものの大きさが異なる。グループBの金具が十二．三×十〇．九センチメートルに対して、グループCは十〇．四×九．七センチメートルで、やや細長で小ぶりである。







（図版4）上・フィラデルフィア美術館本「牡丹に唐獅子図杉戸」右面の引手金具　十〇．四×九．七cm
（図版5）中・フィラデルフィア美術館本「白鸚図杉戸」右面の引手金具　十六．三×十四．三cm
（図版6）下・フィラデルフィア美術館本「立葵図杉戸」四面のうち一番右手の杉戸の引手金具　十八．四×十七．五cm

杉戸Dグループの引手金具（図版5）は、手掛りに丸に蔦紋、縁座は八区に分割され、上下左右の主区と手掛り中央に「丸に蔦紋」と同じ紋が配され、手掛りの四隅は「割り蔦」で飾られている。副区には左右対称に分かれた茎

に二弁の花びら、その上に蕾があしらわれている意匠の植物が配され、鍍金後に墨差しが施されている。この副区部地の魚々子の精度も非常に細かい。また小座と座金の装飾文様も精緻である。したがって、杉戸Dグループの引手金具は制作手法の複雑さと精巧さが古様な風合いを持ち合わせていることより、B、Cグループの引手よりも制作年が遡るように見受けられる。

杉戸Eグループ「立葵図」の引手金具（図版6）は、縁座が八区に分けられ、その前後左右の主要区画部と手掛りに柊のような葉を三枚組み合わせた意匠の周囲に蔓があしらわれている。手掛り中央には縁座と同じ植物が置かれ、「七宝繋ぎ文」で取り囲まれている。この杉戸の法量が一番大きく且つ重量もあるので、杉戸の開閉の手助けとなる抓みが装着されている。本引手金具の意匠や造りは、他のものと大きく異なる。立葵図四面の背面は素地であるが、四面並べた際に向って左端に「佐埜有年」（朱文円印）の描印が施されている。[8] 佐埜有年については不明であるが、明治四十一年（一九〇八）とその翌年に開催された『文部省第二回美術展覧会出品集』と『文部省第三回美術展覧会出品集』の日本画部門に、「佐野有年」の名前と作品写真が掲載されている。[9] 本杉戸の引手金具も質が異なり、「立葵図」の筆者が明治期に活躍した日本画家の佐野有年とするならば、検討方法も全く変わることから、本稿では割愛することとする。

五　城郭御殿杉戸絵の画題と筆者について

本項では名古屋城と二条城に現存する杉戸絵および江戸城の杉戸絵に関する史料と、フィラデルフィア美術館が所蔵する杉戸の各図像を比較検討する。

（一）名古屋城杉戸

戦前までの名古屋城は大小の天守閣と本丸御殿、そして慶長末期の徳川義直の時代より歴代藩主の生活の場となっていた二之丸御殿で構成されていたが、前述の通り二之丸御殿は明治維新後に取り壊され、天守閣と本丸御殿、隣接する諸殿舎は第二次世界大戦時に空襲で焼失した。名古屋城に現存する六十六面の杉戸は、疎開により難を逃れた本丸御殿に設置されていたものである。本丸御殿の障壁画は慶長年度と将軍家光上洛の際の寛永年度の造営時に制作されたものに分かれるが、杉戸に関しては、慶長期の杉戸には黒漆塗の框がつくが蒔絵装飾等は一切なく、一方、寛永期に造営された杉戸には、たとえば上洛殿の一部である「花車図杉戸」（図版11）のように框部分に金蒔絵による豪華な装飾が施してある。(10)

名古屋城本丸御殿の杉戸の図様と設置されていた場所は次の通りである。(11)尚、杉戸絵一図に対して杉戸は各二面となっている。また、各杉戸の表裏や設置された方角は省略した。

玄関・大廊下　竹虎図（一）・竹虎図（二）・竹林豹虎図・槙図
表書院　蝙蝠図・麝香猫図・松山鳥図
対面所　竹鶏図・芍薬図（一）・芍薬図（二）・蘇鉄図・柏梟図・桧図
鶯之廊下・梅之間　槙雉子図・雪中柴垣図・滝図・梅松草庵図・雪松図・鴉図・葡萄棚図
上御膳所　棕櫚薔薇図・芦舟図
上洛殿　竹図（一）・竹図（二）・花車図（図版11）・花桶図・桜図・雉子躑躅図・梅図・芦図

（二）二条城杉戸

二条城の二之丸御殿には杉戸八十枚・板絵二枚の計一五六面が現存し、別所に保管されている。寛永期の二条城障壁画制作はすべて狩野派絵師の手によるが、部屋ごとの筆者の特定については現時点においても決着がついていない[12]。その大きな理由の一つが、筆者名を記した図面類は少数しか伝わっておらず、且つ寛永当時に作成された図面が「行幸御殿之指図」に限られるということである[13]。したがって、杉戸については筆者はもちろんのこと、杉戸が設置されていた場所さえ不明なものもあるが、武田恒夫氏が「二之丸御殿杉戸配置図と題材一覧」を作成しておられ、二条城では現在も調査が継続されている。武田氏が検討された二条城二之丸御殿の杉戸の図様と設置されていた場所は次の通りである[14]。尚、杉戸絵一図に対して杉戸は各二面となっている。また、各杉戸の表裏や設置された方角は省略した。

遠侍　　牡丹図（一）・萩に兎図・竹に虎図（一）・春草に山羊図（一）・春草に山羊図（二）・柳に手毬図・枯木に豪猪図・蘆に雁図（一）

式台　　豹虎図・唐獅子図・手毬に小鳥図・桜に尾長鳥図・松に鶴図（一）・蘆に雁図（二）

大広間　　松に鶴図（二）・山羊図・蘆に雁と家鴨図・柏に鳩図（一）・紅葉に鹿図・柏に鳩図（二）・雪柳に鷺図（一）・竹図・枇杷に栗鼠図・桜図（一）・雪柳に鷺図（二）・牡丹図（二）・雪柳に鷺図（三）・楓図

蘇鉄の間　桜図（二）・蘇鉄図（一）

黒書院　蘇鉄図（二）・雉子図・柴垣に朝顔図・蔦に鳩図・濡鷺図・花籠図（図版12）・若竹図・柴垣に芙蓉図・百合図・紅葉図・垣に手毬図（一）・岩笹に柳図・芙蓉図・椿図（一）

白書院　椿図（二）・白桃図・白芙蓉図・柳図・躑躅図・白牡丹図・枝垂桜図・蘆に鷺図・垣に手毬図（二）・枯木に鳥図・柳に萱草図・芙蓉図・花梨図（一）・燕子花図・林檎図・花梨図（二）・鴨図・揚梅図・若松に桧図・蘆に雁図（三）・紫陽花図・躑躅に根笹図・刈田に雁図・松に尾長鳥図・手毬図・垣に桜（海棠）図・梔子に鶺鴒図

（三）江戸城杉戸

江戸城は、本丸・西之丸・二之丸・三之丸などの諸御殿から成る。徳川幕府が開府した一六〇三年から明治維新の一八六八年までの間に江戸城は三十六回にわたって被災し[15]、明暦三年（一六五七）に発生した振袖火事の際に本丸・二之丸・三之丸・天守閣が焼失した。経済的理由により天守閣は復興されなかったが、本丸・二之丸・三之丸御殿は万治二年（一六五九）に復興され、狩野探幽を筆頭に江戸狩野の絵師たちが障壁画制作に携わった。本丸御殿は将軍の居住、政務・儀礼の場として江戸城の中心的な役割を持った。二之丸御殿は将軍の別邸としての性格を持ち、能舞台や学問所、文庫などが設置されていた。三之丸御殿と本丸の西南に位置した西之丸御殿は、大御所（隠居した将軍）や世子のための住居であったが、吉宗の治世時に廃絶された。西之丸御殿は本丸と同様に、表・中奥・大奥に分けられ、建物の構成や名称も本丸に準じているが、本丸よりも規模はやや小さく、簡略化した造りであった[16]。本丸御殿は万治二年の再建以降、修理を重ねながら一八五年間に渡って存続したが、天保十五年（弘化元年・一八四四）に

炎上して焼失し、その翌年に再建された。しかし安政六年（一八五九）にまた被災し、万延元年（一八六〇）に再建されたが、文久三年（一八六三）にまたもや炎上したため、これを契機に本丸御殿は再建されず、江戸城としての機能は西之丸御殿に移管された。西之丸御殿は寛永十一年（一六三四）、天保九年（一八三八）、嘉永五年（一八五二）、文久三年（一八六三）、明治元年（一八七三）の四度にわたり焼失し、明治二一年（一八八八）に明治宮殿が建設された。

天保十五年五月十日の火事で焼失する前の本丸御殿の障壁画と筆者を伝える史料として、「御本丸表向御座敷絵様　但　弘化度炎上以前筆者」がある[17]。これに本丸御殿の各所の画題と筆者が記録されているが、特に杉戸絵について詳しい記載があり、図様も杉戸の表裏の両面にわたり記録されている。

（A）「御本丸表向御座敷絵様　但　弘化度炎上以前筆者」　※各所に「一」と色をつけ、杉戸と区別した
杉戸の表面・裏面とその方角を示すために四角で囲んだ
仮名とカタカナはそのまま記載、旧字は当用漢字を使用

一	遠侍	唐松獅子	養朴筆[18]
		小壁　流ニ若松	養朴筆
一	同所拭縁御杉戸	東表　はくたく　西裏　葵麝香	永真筆
一	殿上間	花鳥梅桜	養朴筆
一	御次之間	雪柳鷺	養朴筆
一	御書院番所	竹虎	永真筆
		小壁　流ニ若松	永真筆
		御上段御中段御下段　松鶴	探幽筆
一	大広間		

一	後之間	ニ之間三之間四之間小壁	牡丹	探幽筆
一	実検之間	雪柳		探幽筆
		獅子三疋		探幽筆
		一疋窓下向而左之方		養朴筆
		梅鶴		養朴筆
一	医師溜			
一	大広間入口御杉戸	南表	波犀	探幽筆
一	同所北縁頬東御杉戸	東表	岩麒麟	探幽筆
一	大広間御下段前拭縁御杉戸	東表	波竹虎	探幽筆
一	同所西縁中仕切御杉戸	北表	梅ニ鳩ひよ鳥	探幽筆
一	同所御上段脇御杉戸	南表	西王母	探幽筆
一	後之間東御杉戸	北表	蝦蟇	探幽筆
一	柳之間東御杉戸	東表	白鷺	探幽筆
一	同所東廊下入口御杉戸	南表	竹雞	探幽筆
一	同所中仕切御杉戸	南表	牡丹	探幽筆
一	同所北之方御杉戸	北表	桐鳳凰	探幽筆
一	同所北縁頬北之方御杉戸	南表	桃黄鳥	探幽筆
一	同所溜西御杉戸	東表	狛ニみゝつく	探幽筆
一	医師溜北之方四本杉戸	北表	蘇鉄	筆者不知

北裏	紅葉鹿	探幽筆
西裏	狛三鵲	探幽筆
西裏	波鳳凰	探幽筆
南裏	琴高	探幽筆
北裏	枯木啄木	探幽筆
南裏	波犀	探幽筆
西裏	白百合	探幽筆
北裏	芙蓉	養朴筆
北裏	紅葉	洞春筆
南裏	垣蔦	洞春筆
北裏	林和清	洞春筆
西裏	菊	探幽筆
南裏	秋野	筆者不知

一 柳之間西廊下北之方杉戸　南表　唐松白鴨　北裏　陶淵明　洞春筆
一 医師溜西之方御杉戸　西表　象　東裏　水鳥　洞雲筆
一 柳之間溜より大広間御後入口御杉戸　西表　獏　東裏　芍薬　探幽筆
一 大広間御後り大廊下境御杉戸　表　寿老人　裏　岩猿猴　探幽筆
一 大廊下　浜松千鳥　養朴筆
一 同所休息所上下共　秋野　外記筆
一 大廊下より桜之間入口御杉戸　南表　白孔雀　北裏　麝香　養朴筆
一 桜之間溜共　桜　養朴筆
一 同所溜南之方御杉戸　南表　竹三鶴　北裏　琴高　永真筆
一 同所東之方御杉戸　東表　黒鷲　西裏　萩兎　永真筆
一 同所溜より御白書院境入口御杉戸　南表　苅田雁　北裏　雪柳鷺　永真筆
一 御白書院　御上段御下段共　帝鑑　永真筆
但　御納戸構之内竹二流

一 帝鑑間
一 御白書院南縁頬東御杉戸　西表　瀧鯉　東裏　桜孔雀　永真筆
一 同所西縁頬中御杉戸　南表　秋野　北裏　柏蔦　永真筆
一 同所北之方御杉戸　南表　葵麝香　北裏　萩垣朝顔　永真筆
一 同所御次東縁頬御杉戸　南表　岩白鴨　北裏　牡丹猫　永真筆

一 同所北之方御杉戸
一 御連歌間
一 同所北縁頬東之方御杉戸
一 同所西之方御杉戸
一 御白書院御後通より細廊下入口御杉戸
一 御白書院波之間境御杉戸
一 波之間
一 竹之御廊下波之間境御杉戸
一 竹之御廊下
一 竹之御廊下より御黒書院溜入口御杉戸
一 御黒書院
一 西湖間
一 同所溜より御黒書院入口御杉戸
一 御黒書院御上段御後西之方小杉戸
一 同所御後東之方杉戸

南表　伯夷叔斉
松竹梅
南表　吐寿雞
東表　銕杓
南表　王義之
東表　梅鳩
岩波かもめ
北表　枯木みゝつく
竹ニ雀
西表　芦鴨
山水墨絵
小壁　押絵
西湖山水墨絵
西表　刈田
西表　雪竹東破
表　八々鳥

北裏　竹ニ雞
西裏　浜千鳥
西裏　芦五位鷺
北裏　猪薄
西裏　岩かもめ
南裏　張白房
元養朴安永八亥年御修復之節御好ニ而
栄川典信筆
東裏　雀
東裏　へう鷺
東裏　桃小鳥
裏　山路

永真筆
養朴筆
永真筆
永真筆
永真筆
永真筆
如川筆
如川筆
養朴筆
探幽筆
探幽筆
探幽筆
探幽筆
探幽筆
探幽筆
探幽筆

一同所西縁頬中仕切御杉戸　表　王昭君　裏　蘆ニおし鳥　探幽筆
一同所西縁頬より南縁頬境御杉戸　表　沢潟鷺　裏　柏鷲　探幽筆
一同所南縁頬中仕切御杉戸　西表　西施范蠡　東裏　雲梅八ツ頭　探幽筆
一同所より羽目間境御杉戸　西表　耆婆扁鵲　東裏　枯野　探幽筆
一同所南縁頬より東縁頬入口御杉戸　南表　張果老　北裏　雪松小鳥　探幽筆
一同所東縁頬より羽目間境入口御杉戸　西表　流竹さんかう　東裏　かもめ　探幽筆
一同所東縁頬中仕切御杉戸　南表　水鏡之虎　北裏　海棠鳩　探幽筆
一同所北縁頬より東縁頬え出口御杉戸　南表　虎渓三笑　裏　垣紅葉　探幽筆
一御錠口御杉戸　表　薄鹿　探幽筆
一山吹間　籬山吹　但長押上　遠山桜　洞雲筆
一同所小杉戸　西表　鴛鴦　東裏　石竹　洞春筆
一雁之間　苅田雁　洞雲筆
一芙蓉間　薄芙蓉　柳雲筆
一同所より竹之間入口御杉戸　南表　椿　北裏　岩白雉子　林図筆(18)
一竹之間　竹ニ雀　林図筆
一御右筆部屋縁頬境御杉戸　西表　杜若　東裏　桜　祐雪筆
一同所縁頬境御杉戸　西表　あちさひ　東裏　なよ竹雀　休図筆(18)　筆者不知

一芙蓉間縁頬より菊之間頬境御杉戸　西表　菊　探幽筆
一同所縁頬より菊之間頬境御杉戸　東裏　雪柳　休図筆
一菊之間　南表　枯木三鵲　休図筆
一同所縁頬南之方御杉戸　籬菊　探信筆
一紅葉間　南表　芭蕉　北裏　雪柳　狩野権佐衛門筆
一同所北縁頬西之方御杉戸　遠山紅葉　探信筆
一同所東之方御杉戸　西表　芍薬　東裏　薄　筆者不知
一御小性組番所南縁頬東之方御杉戸　西表　松鷹　東裏　岩猿　春雪筆
一桧之間　西表　竹小鳥　東裏　枯野　永真筆
一桧之間より躑躅間入口御杉戸　桧　休山筆
一蘇鉄間　両面共　桧　休山筆
一同所より中之口廊下入口杉戸　流蘇鉄　如川筆
一小十人番所　西表　蘇鉄　東裏　朝魚　筆者不知
一同所腰障子　水鳥　同断
一躑躅間　水鳥　川村正図筆
一焼火間　岩躑躅　柳雪筆
一桔梗間　なよ竹　休山筆
　桔梗　春笑筆

探幽らの杉戸絵制作について甲府徳川家の家臣が残した『人見私記』に克明に記録されている。明暦の大火後、明暦三年八月三十日に探幽は江戸城の杉戸絵制作を命じられ、九月四日から江戸城に参上し制作に着手したことや杉戸絵の謝礼金についてである。[19] 江戸城本丸御殿の普請は万治元年の十二月には終了しているが、『厳有院殿御実紀』には、新築御殿で迎える初めての正月の一月四日に探幽は将軍家綱に召されて御絵始めの儀を勤めていること、そして『柳営日次記』には、さらにその翌年の万治二年の正月三日に探幽の子守政が家綱に謁見していることが記載されている。[20]「御本丸表向御座敷絵様」とこれらの記録を併せてみる限り、総領の探幽も積極的に杉戸絵制作に勤み、江戸城の新規障壁画は高い評価を得ていたことがわかる。滝精一氏は名古屋城上洛殿の上段之間、一之間から松之間に至るまですべて探幽の筆とし、杉戸絵は門人の筆と判断されておられる。[21] 城郭御殿の障壁画制作には武田恒夫氏が述べるところの「空間の序列」が存在し、各種御殿の中核となる部屋の障壁画は格の高い絵師が担当したものと考えられており、各所の障壁画制作には杉戸も含まれ、杉戸絵も同じ絵師が担当したことが推定される。実際、各所の室礼に応じて、筆頭奥絵師の探幽も狩野宗家当主の永真安信も後の木挽町狩野派を磐石なものにした養朴・常信も杉戸絵制作に取り組んいる。『本朝画史』の「杉戸ノ図様」の項にも、「(杉戸に) えがく人物・花鳥・走獣は、すべて極彩色であることがもっともよい。杉戸に水墨で描けば、時が経るとともに図柄もわからなくなってしまう。図は大きな人物像・大鳥・虎・獅子などだが、その杉戸の場所に応じて描く。板の表面は柾目でヤニのないものが尊重される」[22]と書かれており、杉戸絵に関しても場所に対応しながら内容が決められたことを示唆している。

(B)「江戸城本丸等障壁画絵様」

東京国立博物館と東京都立中央図書館、大阪天満宮に「小下絵」に相当する「江戸城本丸等障壁画絵様」と呼ばれ

る絵巻が収蔵されている。これは「伺下絵」であり、注文主の意向を伺うために絵師が提出する小型の下絵で、注文主が検閲した後は絵師の手許に戻される。最終的に注文主の許可が下りてから、絵師はその小下絵に従いこれを拡大して大下絵を作り、障壁画制作に入る。東京国立博物館はこの小下絵二六四巻を所蔵しており、これらの筆者は全体の九割が狩野晴川院養信である。二六四巻の内訳は、本丸御殿が九十五巻、西之丸御殿が六十七巻、二之丸御殿が二十一巻、一橋御殿が七巻、上野本坊が十四巻、「位置不明」が五十二巻、その他が十八巻となっている。この「位置不明」の中に杉戸十三巻分が含まれている。江戸城各御殿の障壁画の総数はとてつもなく膨大な数に上ることが視覚的に理解される。晴川院養信は天保九年（一八三八）の炎上後の西之丸御殿の再建、そして天保十五年（弘化元年、一八四四）の本丸御殿炎上後の再建にあたり、御殿内の障壁画制作の総指揮を執ることを命じられている。一日でも早い再建を目指すため、本丸御殿は模様替えをせず、全て焼失前の姿通りにするよう方針が定められた。[23] つまり、本丸御殿の小下絵と、探幽が総指揮を執った万治二年度の本丸御殿の各所の障壁画の画題は原則的には一致するということである。

名古屋城本丸御殿と二条城二之丸御殿、そして江戸城各種御殿の杉戸絵の画題を比較すると、それぞれに共通する画題と、各城ならではの画題があることがわかる。鳥類、樹木、花木、草花については種類を特定して明確に区別するにはさらなる調査を必要とするため本稿では言及しないが、例えば、名古屋城には本丸御殿を華やかに飾った「花車図杉戸」と「花桶図杉戸」、既出の西之丸御殿の「花籠図杉戸」（図版1）があるが、二条城にも「花籠図杉戸」が現存する。「花車図杉戸」や「花桶図杉戸」も存在した可能性は大きいが、今となっては不明である。しかしながら、江戸城の「御本丸表向御座敷絵様」と「江戸城本丸等障壁画絵様」総覧[24]の双方に「花車図」・「花桶図」・「花籠図」の杉戸は見当たらない。このように、名古屋城と二条城に現存し、江戸城には存在しなかったと考えられる杉戸絵の画

題は次の通りである。

名古屋城本丸御殿「花車図」・「花桶図」・「葡萄棚図」（二之丸御殿「花龍図」）
二条城二之丸御殿「花籠図」・「山羊図」・「春草に山羊図（一）（二）」・「根笹に山羊図」・「枯木に豪猪図」

ただし「花籠図」については、同じ寛永期に制作された杉戸絵でも、寛永三年（一六二六）に障壁画の完成をみた二条城の「花籠図杉戸」（図版12）と寛永十年（一六三三）に制作された名古屋城の「花車図杉戸」（図版11）・の花籠部分や「花籠図杉戸」とでは図様も杉戸絵から醸し出される豪華さも随分と異なる。前者は二之丸御殿の黒書院廊下に、後者は将軍家光が上洛するに際し、その御成御殿として造営された上洛殿に設置されていたことが判明しているが、場所の意味の違いや筆者の実力差を差し引いて考えても、家光の御成りに際して杉戸絵にも力が注がれていることがよくわかる。けれども、財政が逼迫し始めた被災後の江戸城再建においては、上洛殿を飾った「花車図」などの優美で華やかな図様は華美に映るとして描くことを控えるよう命じられたのだろうか。あるいは江戸城には「上洛殿」は不必要なので、「帝鑑図」は別所で描かれたが、上洛殿に付随した杉戸絵は割愛されたのだろうか。「花車図杉戸」が外されている理由は不明だが、「花車図」は江戸時代を通して人気の高い画題となり、屏風絵など多数制作されている。

万治二年の再建以降の江戸城諸御殿の杉戸絵の特徴として、多様な人物図が描かれたことが挙げられる。なぜならば、名古屋城本丸御殿と二条城二之丸御殿に現存する杉戸絵に人物図が残されていないからである。これは伝世した杉戸の絵柄が偶然このような結果になったのか、それとも慶長・寛永期に制作された杉戸絵には人物図が描かれるこ

とが少なかったのか判断ができない。

そこで、「御本丸表向御座敷絵様」に記載されている中国人物像の杉戸絵に注目してみる。「琴高図」・「西王母図」・「蝦蟇（仙人）図」「寿老人図」・「雪竹東破（「坡」で蘇東坡を指すのか）」・「王昭君図」・「西施范蠡図」・「耆婆扁鵲図」・「張果老図」・「虎渓三笑図」（以上、探幽筆）、「林和靖図」・「陶淵明図」（以上、洞春筆）、「琴高図」・「鉄拐図」・「伯夷叔斉図」・「王義之図」（以上、安信筆）、「張白（伯）房図」（常信筆）がその内容であるが、これら人物像の多くが探幽をはじめとして江戸狩野の絵師たちにより頻度高くに描かれた画題であることがわかる。とりわけ「西王母・東方朔図」は狩野元信が大仙院方丈襖に描いて以降、光信や探幽も屏風に描き（光信筆屏風＝出光美術館蔵、探幽筆屏風＝バーンスタイン・コレクション蔵）、狩野派の重要な画題となった。また「虎渓三笑図」は狩野派の始祖・正信と古法眼元信が手がけて以来、狩野派や他の画派も積極的に取り組み、日本絵画に不可欠な主題となった。さらに探幽は、「西施范蠡図」や「耆婆扁鵲図」といった万治二年（一六五九）の江戸城再建当時において認知度が高いとは考え難い中国人物像を杉戸に描いている。狩野永納も「扁鵲図」（米国・ヴァッサー大学付属フランシス・リーマン・ローブ美術館蔵）を残しており、永納の父、狩野山雪は寛永年間に「歴聖大儒像」（東京国立博物館蔵）や「聖賢図押絵貼屏風」（京都国立博物館蔵）、「蝦蟇鉄拐図」（泉涌寺蔵）など数々の人物像を制作している。探幽自身も寛永度（および承応度・寛文度）の内裏造営の障壁画制作の総指揮を執り、紫宸殿の「賢聖障子絵」の揮毫を拝命していることより、この時期の狩野派の絵師たちは中国人物像を描くことに格別関心を寄せていたと考えられ、それが江戸城の杉戸絵にも如実に反映されたものと考えられる。

ところで、幕末の江戸城再建時のほぼ同時期に建造された城郭御殿として川越城の本丸御殿がある。川越城は弘化三年（一八四六）に焼失したため嘉永元年（一八四八）に再建された。井口信久氏は川越城本丸御殿再建時に制作さ

れた現存する杉戸絵（川越市立博物館蔵）の画風や画題が、「江戸城本丸等障壁画絵様」に描かれている下絵の杉戸絵と比較的類似していると指摘されている。但し、御殿障壁画の中で、杉戸絵は襖絵ほどはっきりと部屋の格式と機能に応じて画題が定められていたわけではなく、杉戸絵は各部屋で定められた画題にある程度準じた画題が描かれていたとも述べておられる。[25] 城郭御殿の主要部の障壁画は格の高い絵師が担当したことは判明しており、そこに杉戸絵も含まれることを推定したが、杉戸の設置場所は建造物の構造に大きく左右されるため、「杉戸絵は各部屋で定められた画題にある程度準じた画題」となることは十分想定される。

この他に着目すべき点として、「御本丸表向御座敷絵様」の大広間北之方御杉戸に「桐鳳凰」の名がある。「桐鳳凰図」は室町時代以降、扇面などに多数描かれるようになり、狩野永徳も安土城の四重目の東八畳敷の部屋に「桐に鳳凰」を描いていたことが記録に残っている。[26] そして狩野探幽が屏風（サントリー美術館蔵）に描いて以降、常信や栄川院典信、伊川院栄信ら江戸狩野の絵師たちにも引き継がれている。

最後に「江戸城本丸等障壁画絵様」総覧の「位置不明　杉戸」に着目すると、「錦鶏図」（東京国立博物館列品番号二三六二―43）、「白鸚図」（同列品番号二三六二―44）、「西王母図」・「佐野渡図」（同列品番号二三六二―49）が含まれている。

六　フィラデルフィア美術館所蔵各杉戸絵の特徴と制作時期について

ボストン美術館にも複数枚の杉戸が収蔵されているが、詳細は不明である。筆者は別件調査で収蔵庫に入れていただいた際に、偶然杉戸二枚・四面の杉戸絵を見ることができた。図像は「福禄寿と童子図杉戸」（図版14）と「躑

躅に白鸚図杉戸」（図版20）であるが、二枚の杉戸の間に封筒が挟まっており、「Japanese, Late 18th Century, Kano Yeisen, style of. Heavy Fusuma (1.537 × 1.170) Pair with 04.238. Gift of Yamanaka & Co. 4/7/04」とタイプライターで打たれているカードが入っていた。一九〇四年に伝狩野栄川院典信筆の杉戸絵として山中商会より寄贈されたということである。「福禄寿と童子図杉戸」の引手金具は縁座が十二画に区分され、主区に菊花、副区には菊の茎が蔓のように意匠化され、手掛りには立葵に丸紋があしらわれている。（図版15）その背面の「躑躅に白鸚図杉戸」の左面の引手金具は縁座の形も意匠も全く異なり、右面の金具が外されて剥き出しになっている。

ボストン美術館本「福禄寿と童子図杉戸」は、桃を持った童女ではなく童子を福禄寿に配するという珍しい構成であるが、フィラデルフィア美術館本「寿老人図」（図版13）および「西王母図」（図版16）と比較すると、屈曲した松の枝ぶりや幹の表現、金彩の入れ方、車輪葉の松葉の描き方などが似通うものの、人物像の顔や姿の描き方が異なる。ボストン美術館本の鬱蒼とした松の木の背後にある岩と地のつながりが不可思議で、空間の作り方が稚拙に見える。狩野晴川院養信が作成した「江戸城本丸等障壁画絵様」の小下絵において本丸御殿や西之丸御殿の表の大広間入側に「西王母図杉戸」を複数点確認することができ、江戸城において不可欠な画題であったことが理解される。狩野常信が残した膨大な数の「常信縮図」にも西王母図は数多く描かれており、本画でも数点残している（板橋区立美術館など所蔵）。晴川院養信筆「西王母図」（メトロポリタン美術館など所蔵）も存在し、吉祥的意味のある華やかな西王母図は揮毫依頼もさぞかし多かったことだろう。「江戸城本丸等障壁画絵様」総覧の「位置不明 杉戸」の図様（図版17）とフィラデルフィア美術館本「西王母図杉戸」では、西王母と侍女の人物像や背景など画面全体の構図が異なるが、松の幹が右手にあり、松の枝が左方に伸びる構図は共通する。

次に「福禄寿と童子図杉戸」の背面の「躑躅に白鸚図」とフィラデルフィア美術館本「白鸚図」を比べる前に、探

幽が描いた静岡県立美術館本「白鸚図」（図版22）に着目したい。『厳有院殿御実紀』の万治元年（一六五八）三月十四日の条に、「松平右衛門佐光之より白鸚一隻献ず」とある。[27] 筑前福岡藩の第三代藩主の黒田光之が将軍家綱に白鸚一羽を献上した記録であるが、これは明暦の大火後に狩野派一門が江戸城に参上し、障壁画制作に勤しんでいた時期に相当する。しかしながら「御本丸表向御座敷絵様」には「白鸚図」の名は見えないが、「江戸城本丸等障壁画絵様」総覧を見る限り、白鸚図杉戸は「西之丸御殿 表 桜の間」・「西之丸御殿 大奥 対面所」・「位置不明 杉戸」の四箇所に設置されていたことがわかる。万治度の再建の際に本丸御殿の障壁画制作に白鸚図を加えるのが間に合わなかったのか、それとも画題として新しすぎて許可が下りなかったのかその理由は不明であるが、西之丸御殿にはこのように多くの白鸚図杉戸が制作されており、それが天保九年（一八三八）の炎上後の西之丸御殿の再建の際にも前例が活かされたことより、白鸚図杉戸は制作されたものと考えられる。ところで、黒田光之が献上した「白鸚一隻」はおそらく雄一羽であり、雌と雛鳥は探幽の創作とも推測できる。雌雄と雛鳥の白鸚は探幽筆「四季花鳥図」（図版21）（永平寺蔵）にも取り入れられ、常信や清原雪信ら狩野派の絵師たちに描き継がれた。襖絵、そして杉戸絵として江戸城西之丸御殿を飾ったのである。ちなみに、大奥対面所二之間の襖絵を鴨から白鸚に描き直すことを将軍が命じていることも判明している。[28]

「躑躅に白鸚図杉戸」は背景に遠山が描かれ、画面手前にある鮮やかな赤色の躑躅が強いアクセントとなっている。中景となる土坡に白鸚の雌雄と雛鳥が描かれ、その背後の桃色の躑躅も美しい。一方、フィラデルフィア美術館本「白鸚図杉戸」（図版19）は背景を省略し、桃の枝の上にいる雄の白鸚が小笹の横にいる雌と雛鳥三羽を見下ろしているが、余白を活かした対角線の構図を創出している。ボストン美術館本の杉戸絵は両面ともに画面いっぱいに描くことが意識されているように見えるが、フィラデルフィア美術館本杉戸絵の「寿老人図」・「西王母図」・「白鸚図」は杉

戸の地を余白と捉え、空間を活かした構図になっている。また白鸚を比較すると、フィラデルフィア美術館本は羽根や羽毛がより精緻に描かれており、画面は整理され、全体的に洗練されている。

杉戸Bグループの「寿老人図」と「西王母図」は同じ引手金具を持ち、松の幹と枝葉、着衣の衣文や沓の表現、顔料の質などから同じ工房で制作されたものと考えられるが、「白鸚図」は工房も異なると思われる。本図杉戸の背面は「紅葉に鹿図」（図版18）であるが、いずれも力量の高さが窺える。引手金具の造作と意匠からも、「白鸚図・紅葉に鹿図杉戸」は他の杉戸よりも時代が少し遡るのではないだろうか。

最後に、同じくBグループに属する「佐野渡図杉戸」（図版23）に目を向けたい。「江戸城本丸等障壁画絵様」総覧の「位置不明 杉戸」にも「佐野渡図」（図版24）が登場するが、晴川院養信の下絵とフィラデルフィア本「佐野渡図杉戸」を比較すると図様が近似していることがわかる。杉戸の胡粉はかなり落ちているが、それでもたちこめる大気は金泥引きで表現され、板の上に描かれているにもかかわらず、雪降る中を優美なる殿上人が馬を進めている様子が見事に表現されている。江戸城が名古屋城と二条城と大きく異なるのは、「中奥」と「大奥」が存在することであるが、「中奥」では数々の名所絵が描かれ、「大奥」では「栄華物語絵」や「源氏物語絵」など王朝文化に誘う絵画空間が創出されていた。「佐野渡図杉戸」もその一環で制作されたものと考えられ、江戸城の「中奥」と「大奥」の絵画の世界観が徳川家が関係する他の城郭御殿の障壁画に大きな影響を与え、それが杉戸制作にも繋がったものと考える。その証左として、同じBグループの「唐子図杉戸」の背面は「瀬田橋図襖」であり、典型的な名所主題が選ばれている。本杉戸絵も「寿老人図」と「西王母図」と同じ工房作と捉えることができる。Bグループのいずれの杉戸にも良質な顔料が使用されており、十三本芯の三ツ葉葵紋の引手金具を併せて考えると、晴川院養信と同時代に活躍した狩野派正系の絵師たちが手がけた杉戸絵と解釈してよいかと思われる。

しかしながら、「本丸表向御座敷絵様」に「一竹之御廊下　竹ニ雀　栄川典信筆　元養朴安永八亥年御修復之節御好ニ而」と記されてあり、栄川典信が安永八年度の修復事業の際に常信の杉戸絵を第十代将軍徳川家治の好みに応じて描き変えたことがわかり、つまり栄川典信もいくつかの杉戸を手がけていたことは事実であるため、ボストン美術館本をはじめ山中商会を通して海外に渡った杉戸絵については、栄川典信の作品とも併せて検討する必要がある。

七　おわりに

杉戸に描かれた絵画は、室内を彩る障壁画の導入的役割を果たした。しかし、建造物の改築や移築、度重なる修理や保存状態の悪さなどより日本国内においても杉戸絵を研究対象とすることは難しいが、ましてやそれが海外に流出した杉戸となると困難極まる。

名古屋城と二条城に現存する寛永期に制作された杉戸絵と「御本丸表向御座敷絵様 但　弘化度炎上以前筆者」に記録されている杉戸絵の内容はかなり異なることがわかったが、それはつまり万治二年に再建された江戸城の障壁画の内容が十年余りで大きく変化したということになる。これは狩野探幽の影響がより強まったと思われる。城郭建築の障壁画の筆者を考える場合、狩野派を中心に考えざるを得ないが、探幽画の余白や空間の捕らえ方が杉戸絵に及ぼす影響や作図の手法も検証すべき課題である。それがフィラデルフィア美術館が所蔵する「花鳥人物図杉戸」の制作時期や担当絵師（工房）、これらの杉戸が元来設置されていた建造物の特定へと繋がるものと期待する。

今後は城郭・寺社建築に関連する史料を探りながら、フィラデルフィア美術館やボストン美術館以外の欧米の美術・博物館に収蔵されている海外に流出した杉戸の調査はもちろんのこと、現存する城郭御殿と寺社仏閣の杉戸絵調

査を並行して進め、建造物の造営年に応じた年代ごとの杉戸絵の画題や図様、そして引手金具の意匠などのデータを集積し、考察を深めたい。







（図版13）上・フィラデルフィア美術館本「寿老図杉戸」（図版15）下・ボストン美術館本「福禄寿と童子図杉戸」引手金具
（図版14）中・ボストン美術館本「福禄寿と童子図杉戸」各一七七．三×一三五．八cm







（図版16）上・フィラデルフィア美術館本「西王母図杉戸」（図版18）下・フィラデルフィア美術館本「紅葉に鹿図杉戸」
（図版17）中・晴川院養信筆「西王母図」「江戸城本丸等障壁画絵様 位置不明 杉戸」巻子一巻　東京国立博物館







（図版19）上・フィラデルフィア美術館本「白鷴図杉戸」
（図版20）中・ボストン美術館本「躑躅に白鷴図杉戸」各一七二・二×一三六・二cm
（図版21）下・探幽筆「四季花鳥図」のうち「秋図」（部分図）寛文十二年（一六七二）絹本著色　一五一・六×八一・三cm　永平寺







（図版22）上・狩野探幽筆「白鷳図」寛文二年（一六六二）以前　絹本著色　五四・二×九四・三cm　静岡県立美術館

（図版23）中・フィラデルフィア美術館本「佐野渡図杉戸」

（図版24）下・晴川院養信筆「佐野渡図」「江戸城本丸等障壁画絵様 位置不明 杉戸」巻子一巻　東京国立博物館

［注］

（1）引手の部分名称は久保智康氏が使用されている名称に従う。久保氏は「大覚寺襖絵付属の引手金具―障壁画群の成立経緯を巡って―」『学叢第十五号』（京都国立博物館、一九九三）において、引手金具の構成として楕円形の「手掛り」と鐶状の「縁座」が組み合わさり、間に「小座」と呼ぶ飾環と外周小刻みを施す「座金」からなる、と解説されている。久保氏は『桂離宮御殿整備記録』（宮内庁、一九八七）の河田貞氏の「飾金具の調査」で使用された名称を参考にされている。

（2）明治六年（一八七三）一月十四日に明治政府太政官から陸軍省に発せられた太政官達「全国ノ城廓陣屋等存廃ヲ定メ存置ノ地所建物木石等陸軍省ニ管轄セシム」の件、および大蔵省に発せられた太政官達「全国ノ城廓陣屋等存廃ヲ定メ廃止ノ地所建物木石等大蔵省ニ処分セシム」の件の総称。

（3）『名古屋城特別展　巨大城郭名古屋城』名古屋城総合事務所（二〇一三）の「54 二之丸御殿杉戸絵　花籠図・竹鶏図」作品解説に記載。

（4）「養源院杉戸絵」など作家研究の一環で有名な杉戸絵が取り上げられ、研究されることはあっても、杉戸絵の総合的研究はなされていない。近年開催された画期的な展覧会として、平成二十一年に川越市博物館で開催された「第33回企画展　川越城本丸御殿の杉戸絵と舩津蘭山」が挙げられる。

（5）久保智康「名古屋城本丸御殿障壁画付属の引手金具 ―慶長・寛永期の金具工房試論」『学叢 第一七号』京都国立博物館（一九九五）P46

（6）1968: Treated with soluble nylon (painted areas) and metal doorpull polished and cleaned by Gale Wever.

（7）大隅三好『本当によくわかる日本の家紋事典』（二〇一五）p.72

（8）『海外所在日本美術品調査報告3　フィラデルフィア美術館　絵画・彫刻』p84 に、立葵図　印章「佐埜有年」（朱文円印）と記載されているが、本杉戸を直接ご覧になられた細野正信氏は「狩埜有年」と解読されておられる。

（9）「佐野有年」の作品が『文部省第二回・第三回美術展覧会出品集』掲載されていることは、東京文化財研究所の江村知子氏にご教示いただいた。

（10）『名古屋城特別展　失われた国宝　名古屋城本丸御殿展 ― 創建・戦火・そして復元』名古屋城特別展開催委員会（二〇〇八）の「4．竹林豹虎図　本丸御殿玄関杉戸絵」の作品解説に、慶長期と寛永期の框の違いが説明されている。

（11）武田恒夫監修『重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画集』名古屋城管理事務所（一九九〇）の「名古屋城本丸御殿障壁画目録」pp.278 ～ 279 の中から、各所にある杉戸絵の画題を抜粋した。

（12）『元離宮二条城』（一九七四）で、土居次義氏は筆者まで踏み込んで言及され、武田恒夫氏も部分的に筆者を指摘している。

（13）松本直子「二条城の障壁画」『江戸東京博物館開館二十周年記念　二条城展』江戸東京博物館（二〇一一）p.14

（14）武田恒夫「二の丸御殿障壁画総論」『国華　第一三〇〇号』国華社（二〇〇四）p.47

（15）伊藤渉「江戸城の火災被害に関する研究」『日本火災学会研究発表会概要集』日本火災学会（二〇〇七）pp.110 ～ 111

（16）千野香織「江戸城障壁画の下絵」『特別展観　江戸城障壁画の下絵 ― 大広間・松の廊下から大奥まで』東京国立博物館（一九八八）pp.107 ～ 108

（17）『松平慶永等編集『徳川礼典録・附図』尾張徳川黎明会（一九四二）の附図として、「江戸城再建」の画題と筆者一覧がある。徳川義宣「将軍の殿舎と規式」『将軍の御殿 ― 江戸城障壁画の下絵』徳川美術館（一九八八）でも転載されている。

（18）狩野常信の号に「養朴」があるが、『徳川礼典録・附図』では、「養扑」と記載されている。また、「林図」、「休図」（原文は旧字体）の名前はともに、狩野休円清信の「休円」の誤記と考えられている。

（19）人見求編『人見私記』（一六三一 ～ 一六八〇）国立国会図書館蔵

（20）『江戸幕府日記 第一編之2万治年録』野上出版（一九八六）p.202 ※「柳営日次記」（内閣文庫蔵）の一部を複製

（21）滝精一「名古屋上洛殿の探幽画（上）」『国華三六八号』（一九二一）pp.225-237

（22）笠井昌昭他訳注『本朝画史』同朋社出版（一九八五）p.382

（23）千野前掲論文 p.112

（24）『江戸城障壁画の下絵〈調査報告書 江戸城本丸等障壁画絵様〉』東京国立博物館（一九八九）の「江戸城本丸等障壁画絵様総覧」（pp.60 ～ 124）に掲載されている全図様の中から杉戸絵のみを抽出した。

（25）井口信久「川越城本丸御殿の杉戸絵」『第33回企画展川越城本丸御殿の杉戸絵と舩津蘭山』川越市立博物館（二〇〇九）p.15

（26）奥野高広・岩沢愿彦校注『信長公記』角川書店（一九七〇）p.215 に「四重め、西十二間に岩に色々木を遊ばされ…（略）…東八でう敷、桐に鳳凰をかゝせらるゝ。」とある。
（27）『徳川実記 第三篇 巌有院殿御実記巻十五』経済雑誌社（一九〇五）p.262
（28）千野前掲論文 p.111

［参考文献］

人見求編『人見私記』（一六三一～一六八〇）国立国会図書館蔵
成島司直編『徳川実記 第三篇 巌有院殿御実記巻十五』経済雑誌社（一九〇三）
松平慶永等編集『徳川礼典録・附図』尾張徳川黎明会（一九四二）
滝精一「名古屋上洛殿の探幽画（上）」『国華三六八号』（一九二一）
村田治郎・関野克編集『元離宮二条城』小学館（一九七四）
伴三千雄『江戸城史―増補 東京城史―』名著出版（一九七五）
笠井昌昭他訳注『本朝画史』同朋社出版（一九八五）
『特別展観　江戸城障壁画の下絵―大広間・松の廊下から大奥まで』東京国立博物館（一九八八）
『将軍の御殿―江戸城障壁画の下絵』徳川美術館（一九八八）
『江戸城障壁画の下絵〈調査報告書 江戸城本丸等障壁画絵様〉』東京国立博物館（一九八九）
森山英一『明治維新・廃城一覧』新人物往来社（一九八九）
武田恒夫監修『重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画集』名古屋城管理事務所（一九九〇）
『海外所在日本美術品調査報告3　フィラデルフィア美術館　絵画・彫刻』古文化財科学研究会（一九九三）
久保智康「名古屋城本丸御殿障壁画付属の引手金具―慶長・寛永期の金具工房試論」『学叢 第一七号』京都国立博物館（一九九五）
大隅三好『本当によくわかる日本の家紋事典』金園社（二〇一五）

武田恒夫「二の丸御殿障壁画総論」『国華　第一三〇〇号』国華社（二〇〇四）
『名古屋城特別展　失われた国宝　名古屋城本丸御殿展―創建・戦火・そして復元』名古屋城特別展開催委員会（二〇〇八）
「川越城本丸御殿の杉戸絵」『第33回企画展　川越城本丸御殿の杉戸絵と舩津蘭山』川越市立博物館（二〇〇九）
『開府四〇〇年記念　狩野派と名古屋城四〇〇年』名古屋城特別展開催委員会（二〇一〇）
『江戸東京博物館開館二十周年記念　二条城展』江戸東京博物館（二〇一二）
『名古屋城特別展　巨大城郭名古屋城』名古屋城総合事務所（二〇一三）

（大学院博士後期課程修了／多摩美術大学准教授）

SUMMARY

Paintings of Birds, Flowers, and Human Figures on *Sugito* in the Collection of the Philadelphia Museum of Art and Consideration of the Themes of *Sugito* Painting

Kyoko Kinoshita

The Philadelphia Museum of Art (PMA) has twenty *sugito* with paintings of Birds, Flowers, and Human Figures. After the Meiji Restoration in 1868, many castle buildings were destroyed and precious architectural components and ornamental fittings including *fusuma* and *sugito* were put up for auction after building demolition. The twenty *sugito* were acquired by PMA through Yamanaka Co., Ltd in 1966. There are five kinds of *hikite* (metal pulls) design among the twenty sliding doors, and two *hikite* have the Tokugawa crest called "Mitsuba Aoi" in the center. Another *hikite* has "Mutsuba Ura-aoi" decoration which is similar to one of Nagoya castle's *hikite*. Therefore, it could be assumed that some of the PMA *sugito* may have been belonged to some branch families of the Tokugawa shogun. It is known that no human figures on the *sugito* of either Nijo or Nagoya castles existed. But there were various kinds of human figures in the *sugito* paintings for the main hall, called as *Honmaru goten* of Edo castle, which was reconstructed right after a great fire in 1657, and his painting project was finished by end of 1659. Kano Tan'yū was commissioned to direct all the interior paintings for Edo castle. According to a record, "*On Honmaru Omote-muki Ozashiki Eyō*," there were many kinds of Chinese figures for *sugito* paintings, as well as flower and birds in the reception hall located in the *Honmaru goten*. In the mid-19th century, Edo castle was destroyed by fire again, and Kano Seisen'in Osanobu was appointed as a director to reproduce the interior wall paintings based on the Tan'yū's plan of almost two hundred years earlier. Tan'yū's ideas strongly influenced and were reflected on wall paintings, including *sugito*, throughout the Edo period. A comparison of the iconography and painting subjects before and after 1659 are discussed in this essay.